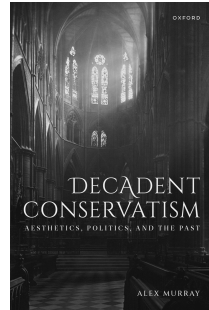


書 評

Alex Murray, *Decadent Conservatism: Aesthetics, Politics, and the Past*
(Oxford University Press, 2023)



庄子 ひとみ (順天堂大学)

本書はヴィクトリア朝世紀末の唯美主義を担ったデカダンスの作家と英国保守主義の関わりについて出版事情、美学、哲学、政治思想や戦争史をも横断しながら多角的に論じた研究書である。オスカー・ワイルド、アルジャーノン・スウィンバーンにW.B. イェイツなどの同時代を代表する作家から、雑誌編集者としても活躍したアーサー・シモンズ、唯美主義詩人マイケル・フィールド¹、さらにアーサー・バルフォアのような保守党を指揮した首相経験者など議論対象は幅広く、同時代におけるデカダンス、唯美主義と保守主義の共通点を見出すという目的は各章で一貫していながら、今後の唯美主義文学研究における新たな可能性を提示している。短期間で廃刊に追い込まれた *The Whirlwind* や *The Savoy* にも光を当て、定期刊行物研究としても興味深い論考となっている。

正直に言えば「デカダンスの作家と（政治的イデオロギーの）保守主義？」とそのタイトルが提示する新鮮な組み合わせに、評者は内容予想も覚束ないまま読み始めた。そして、そのような読者の戸惑いを著者 Murray は予想していたらしい。英国のデカダンスと保守主義は現代批評の枠組みでも未だ互いに相容れないもの同士、uncomfortable bedfellows (2) であると認めた上で、これから展開する議論の意図や背景を序章で一旦整理し紹介してくれる。尚、本書では一貫して「保守主義」が小文字ではじまる conservatism と記されているのだが、この点について「政党としての保守党 the Conservative Party の政治家を議論の対象として扱う一方で、conservative という用語をより広い意味で用い、この語の使用において哲学的な態度と社会的な性質を表明するため」(3) と説明している。この姿

勢は著者が議論を政治的イデオロギーとしての保守主義の型にはめることを避け、「保守」の定義を確認しながら、より広い文脈で柔軟に論じたい意図を示していると言えるだろう。

実際、著者が危惧しているように、ヴィクトリア朝後期の保守主義が政治社会的イデオロギーとして定着した一方、文芸における新しい表現を求めながら審美的な生活様式の実践を追求したデカダンスは、其々が対極的なものとして独立し存在しているという固定観念に未だとらわれている読者は少なくない。そのイメージとは、過去や伝統を重視し愛国的とされる保守主義と、新しい価値観を国内外に求め古い慣習に挑戦するコスモポリタンとしてのデカダント達ではないだろうか。さらに、セクシュアリティについて「公的には」黙する保守主義と、官能的な生活への関心を常に惹こうとするデカダントというイメージも定着している。この二項対立的な固定観念の存在を認めた上で、著者は保守主義とデカダンスは互いに完全に排他的な存在ではなく、保守的な一連の思想や価値観に賛同する唯美主義的な個人主義は明らかに存在していたのだと主張する。英国のデカダンスや唯美主義の多くが基本的に保守的な視点を有しているにも関わらず、従来 of 唯美主義批評は、この点について殆ど論じてこなかった。新しい世紀に向かう中でヴィクトリア朝世紀末のデカダント達の態度は「官能的な喜びを求める生活を、唯その目的のために受け入れること」と「劇的な社会変化に対する保守的な反乱」に二分化することができが、著者は「この二つは相互に依存し合う特徴であるにも関わらず、1980年代以降の研究は前者の点についてのみ論じているものに偏っている傾向がある」(2)と指摘している。

ヴィクトリア朝世紀末の文学を理解する上で、デカダンスの中に保守的な性質を見出すことは極めて重要であると著者は繰り返し強調する。前衛的な唯美主義に実は保守主義が潜んでいることはモダニズム研究ではすでに広く認められており懐古的なポリティクスとして論じられているように、世紀末文学の研究者も研究対象の作家達が近代的体験とどのように関わり、新しい世紀を迎えるために過去を結びつけたのか、読み直す必要があるのだろう。デカダンスも保守主義も、混沌とした世界からの救済を求め、理想的な社会を見出すために過去に目を向けたという共通点を論じている本

書は、全5章およびCodaで構成されている。

第1章‘Alternative Communities: Decadent-Conservative Little Magazines’では、保守的な特徴を持つ世紀末デカダンスの定期刊行物を複数取り上げ、論じている。*The Savoy*をはじめとして、ヴィクトリア朝社会で台頭してきたブルジョワ的かつポピュリスト的と見なされるものに対抗するため創刊されたこれらの雑誌や新聞はどれも短期間で廃刊になったが、保守主義を進歩的な芸術と融合させようとする野心的な若者たちによって編集されていた共通点があると分析している。その中でも本章ではネオ・ジャコバイト運動において主導的な役割を果たしたとされる新聞 *The Whirlwind* (1890)を中心に論じている。ハーバート・ヴィヴィアンとスチュアート・アースキン²によって創刊され、仏詩人のステファヌ・マラルメや画家J.M.ホイッスラーにウォルター・シッカートなど、世紀末唯美主義や象徴主義に分類される人物の作品を掲載する一方で、積極的にジャコバイト的な政治の必要性を訴えた。その編集方針は文芸と政治が共存する興味深い例である。印刷所が扇動的な記事の掲載を拒否し、アースキンの父親が財政的支援を打ち切ったため創刊から一年待たずに廃刊となったが、その紙面は保守的なデカダンスのためのプラットフォームとみなすことができる。個人の自由が侵食される危機感を読者に示した定期刊行物の挑戦として注目し値するだけではなく、ヴィクトリア朝世紀末における急進的な芸術と反動的政治の共生関係をも示している。

第2章‘The Politics of *Fin-de-Siècle* Individualism’では、当時の個人主義がリベラリズムの改革的熱意に対抗する保守主義を明確にする上で中心的なものであり、デカダンスの文学が民主主義的な多数派支配に挑戦する上で不可欠なものであったとし、世紀末文学と政治における個人主義に注目し考察している。論じる対象としてはオスカー・ワイルドとアーサー・バルフォアの個人主義解釈を中心に取り上げ、比較分析している。ワイルドがバルフォアを活字で攻撃したことで表層的には相容れない存在に見えるかもしれないが、二人の間にはもっと複雑な文脈間の対話があったのではないかという仮説のもと、バルフォアはワイルドやペイターに共感し唯美主義的な個人主義について難解な対話を展開していた点を指摘し、バルフォアは唯美主義者に内在する保守主義を明確化しようとしていたのだと考察

している。最終的に、ヴィクトリア朝の英国が過去を守ると同時に衰退を避けることができるのは、社会の変化を受け入れることによってのみ可能であるという主張をワイルドとバルフォアは共有していると結論づけている。

第3章 ‘Throne-and-Altar Decadence’ では、中世からヴィクトリア女王の死、エドワード七世の即位までの王位の変遷をたどりながら、デカダンス文学がヴィクトリア朝の厳格なプロテスタンティズムを批判する手段として過去の君主制を理想化していた様相を紹介している。例えばライオネル・ジョンソンはスチュアート朝を理想として掲げ、ヴィクトリア朝的な価値観に対抗しようとした。彼らのスチュアート家礼賛は、ヴィクトリア朝民主主義を拒絶する上で不可欠であった。また、ヴィクトリア女王を強く否定的に評価しながらエドワード七世の時代の到来を希求し、そうなれば民主化を後退させることができるのではという彼らに共通する希望的観測についても考察している。

第4章 ‘Folk Decadence’ では、この時代における人類学と民俗学の台頭に注目し、デカダンスの作家たちが民俗学的な伝統や儀式を称揚した方法の複雑な様相について考察している。彼らが過去に目を向けるようになった背景には、神秘主義や信仰が可能にする精神的・協働的な機能を合理化しようとする唯物論的实践があったと著者は主張している。例えばイエイツやウィリアム・シャープは近代性を批判する手段を探し求めた結果、世紀末の疎外感や物質主義に代わるものとして民俗伝承に可能性を見出していた。シャープとイエイツの両者にとって、民俗伝統の保存に対する最大の脅威は学術的研究の台頭によるものであり、この懸念は保守的なデカダンス作家であるアーサー・マッケンと共通している。神話学者や人類学者を非難する中でマッケンは独自の民俗美学を提示しており、この文脈においてヴィクトリア朝的な価値観へどのように反応したのか、マッケンの世界観の変遷についても考察している。

第5章 ‘Decadence, Imperialism, and Jingoism’ では、スウィンバーンやマイケル・フィールドを例に、デカダンスの作家達がボーア戦争(1899～1902年)のような戦争に対して見せた反応を検証している。唯美主義とジingoイズムの交差は結果的にデカダンスの保守的傾向を明らかにしている

と指摘しつつ、彼らの戦争への詩的応答が紹介されている。作品中で戦死者を追悼する彼らの試みは、しばしば感傷的なナショナリズムを露呈しており、デカダンス文学を読む際にコスモポリタンな作品であるはずだという前提で読んでしまうと違和感を感じずにはいられないという指摘が評者には印象的であった。章の最後では、ウィンストン・チャーチルの母親、ランドルフ・チャーチル夫人が息子ウィンストンの協力を得て編集した *The Anglo-Saxon Review* (1899-1901年) を取り上げ、唯美主義と帝国主義を融合させようとした試みで創刊された雑誌であり、例えるなら *The Yellow Book* の愛国的、貴族的、かつ保守的なバージョンであると紹介している。

終章である‘Coda’は‘Symons and *The Superwomen*’という副題が付されており、女性参政権運動に対するアーサー・シモンズとマイケル・フィールドの反応を比較している。頁の大半が割かれているのはシモンズの未発表の茶番劇 *The Superwomen: A Farce*³ である。神経衰弱に陥り表舞台から退いていた頃のシモンズが執筆し、本人にも出版する意図がなかったことを考慮した上で一読しても挑戦的な内容であり、女性参政権運動について茶化す内容であるだけでなく明白に性差別的な内容である。もうひとつの比較対象としては、政治的平等を求める闘争が女性の感情的受容性を脅かすかもしれないという、女性作家マイケル・フィールドが抱えていた懸念について短く論じられている。

著者はジェンダーに関するシモンズの保守主義は、20世紀初頭のあらゆる社会変化に対する一般化された敵意の一部であると断じ、さらにシモンズの都市論 *London: A Book of Aspects* (1909) の一節を紹介する。世紀転換期を迎えた都市ロンドンの再開発はすべて、シモンズが我慢できなかった機械の騒々しい時代の徴候であった。シモンズはこの時点で、保守主義者としてのデカダントになっていたのである (256)。

シモンズ書誌にも収録されていない *The Superwomen* の内容について一部を紹介してみると、まず舞台は女性に政治的権利が与えられ、最初の選挙で国会議員の男性を全員落選させた近未来である。この「スーパーウーマン」たちによる新政府は、最新の社会的・急進的・帝国主義的なやり方で、その義務を果たしていく。そんな中、難題も次々発生し、ホップ(したがつてビール)の不足が起こり、イギリスにおけるスーパーウーマンの支配を

自国の現状に対する脅威とみなすドイツとフランスによる侵略が迫るが、スーパーウーマン政府は改革の名の下に財源を使い果たしてしまった。街角のいたるところには(裸体ではなく服を着た)女性の彫像を建て、男性の彫像はすべて撤去される。侵略が間近に迫る中、スーパーウーマン政府は陸軍と海軍に復職し、男性政治家全員が議会に招かれる。しかし、財務省の財源は枯渇しアメリカの大富豪に救われるまで、侵略軍を撃退することはできなかった。大富豪は見返りとしてイギリス人がアメリカ風の発音と綴りを採用すると約束すれば国を救済すると約束する。他の登場人物も、ジブシーの伝承に取りつかれロマニー語で謎をかける芸術家や、長い前髪が常に顔を隠してしまっている詩人イエイツ、哲学的な思索にエネルギーを費やす元閣僚の哲学者バルフォアなど、「これはフィクションです」と言い逃れが出来なさそうなキャラクター設定がされている。アメリカ化される恐怖と女性台頭への恐怖が強烈なディストピアとして展開されている様相に、精神的に衰弱していたとされた当時のシモンズのエネルギーを感じ、もはや爽快感さえ覚えてしまうのは評者だけだろうか。これは文字通り、世に出ない前提だからこそ完成し得た「笑劇」なのだろう。著者は名だたるシモンズ研究者達がシモンズ書誌を編纂する際、*The Superwomen* 原稿が米国で保管されているにもかかわらず、あえて含めなかった可能性を推測しているけれども、非常に勿体無いと感じてしまった。著者がこの終章でシモンズの幻の原稿を取り上げてくれたことに感謝しつつ、シモンズ作品を研究している評者としては、シモンズの女性観の議論において彼が*The Savoy* 編集者として他雑誌では類を見ないほどに無名あるいは外国籍の女性にも作品発表の場を提供しようと尽力していた点に言及していないことに、やや消化不良な印象を持った。しかし、著者が最後にまとめているように*The Superwomen* もまた、デカダントの保守主義が近代性に対する応答として見せた複雑で多面的な反応の一例なのだろう。

註

- 1 Katherine Harris Bradley (1846-1914) と彼女の姪であり人生のパートナーでもあった Edith Emma Cooper (1862-1913) が執筆活動の際に共同使用したペンネーム。

- 2 スコットランド国立図書館の索引では Stuart Ruaraidh Joseph Erskine (1869-1960) と表記されているが、資料によって Ruaraidh Erskine、あるいは本書のように Stuart Erskine のみの表記も多い。
- 3 この原稿は最も網羅的であるとされる次のシモンズ書誌にも掲載されていない。Beckson, Karl, Ian Fletcher, Lawrence W. Markert, John Stokes, eds. *Arthur Symons: A Bibliography* (Greensboro: ELT Press, 1990)